

## 九州沿岸初記録のマンジュウダイ科魚類 ミカツキツバメウオの記録

畑 晴陵<sup>1</sup>・本村浩之<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 〒 890-0065 鹿児島市郡元 1-21-24 鹿児島大学大学院連合農学研究所

<sup>2</sup> 〒 890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館

### はじめに

ツバメウオ属魚類 *Platax* は日本国内からミカツキツバメウオ *Platax boersii* Bleeker, 1853, ナンヨウツバメウオ *Platax orbicularis* (Forsskål, 1775), アカククリ *Platax pinnatus* (Linnaeus, 1758), およびツバメウオ *Platax teira* (Forsskål, 1775) の4種が報告されており(岸本ほか, 1988; 林・萩原, 2013), 鹿児島県内においては全種が標本に基づき確認されている(西, 2014; Motomura, 2017; 木村ほか, 2017; 岩坪, 2017; 小枝, 2018; Nakae et al., 2018; 栗岩, 2018). 本属魚類の多くは沖縄県において食用となるほか(岸本, 1997), 幼魚は成魚と大きく形態が異なることでも知られる。アカククリの幼魚の体は黒色を呈し, 外縁が鮮橙色に縁取られることから有毒のヒラムシ類やウミウシ類に, ナンヨウツバメウオの幼魚は体が一樣に茶色を呈することから, 枯葉にそれぞれ擬態すると考えられている(河野, 1982; 岸本, 1997; 吉野, 2008; 西, 2014; 波戸岡, 2018). 幼魚の変わった外見や, 多くの種がひじょうに人に慣れやすく, 飼育しやすいことから観賞魚として扱われる種も多い(岸本, 1997; 小枝, 2018; 公益財団法人鹿児島市水族館公社, 2018).

一方, ミカツキツバメウオは神経質で人に慣

れにくく, 擬態の有無も不明であり, 生態等に不明な点の多い種として知られる(岸本, 1997; Heemstra, 2001). 本種の日本国内における報告例は少なく, 鹿児島県内における記録も大隅諸島からのものに限られていた(鍋木, 2016; Motomura and Harazaki, 2017; 木村ほか, 2017). 2018年9月11日, 大隅半島東岸に位置する内之浦湾において, 1個体のミカツキツバメウオが採集された。本標本は本種の九州沿岸における初めての記録となるため, ここに報告する。

### 材料と方法

計数・計測方法は岸本ほか(1988)にしたがった。標準体長は体長と表記し, 体各部の計測はノギスを用いて0.1 mmまでおこなった。ミカツキツバメウオの生鮮時の体色の記載は, 固定前に撮影された内之浦湾産標本(KAUM-I. 120205)のカラー写真に基づく。標本の作製, 登録, 撮影, および固定方法は本村(2009)に準拠した。本報告に用いた標本は, 鹿児島大学総合研究博物館に保管されており, 上記の生鮮時の写真は同館のデータベースに登録されている。本報告中で用いられている研究機関略号は以下の通り: BSKU(高知大学理学部海洋生物学教室); KAUM(鹿児島大学総合研究博物館); NSMT(国立科学博物館)。

### 結果と考察

*Platax boersii* Bleeker, 1853

ミカツキツバメウオ (Fig. 1)

標本 KAUM-I. 120205, 体長 270.8 mm, 全長 330.0 mm, 鹿児島県肝属郡肝付町内之浦湾(31°17'N, 131°05'E), 水深 35 m, 2018年9月11日,

Hata, H. and H. Motomura. 2018. First record of *Platax boersii* (Perciformes: Ehippididae) from coastal waters of Kyushu, southern Japan. *Nature of Kagoshima* 45: 73–77.

✉ HH: the United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University, 1-21-24 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan (e-mail: k2795502@kadai.jp).

Published online: 4 December 2018

[http://journal.kagoshima-nature.org/archives/NK\\_045/045-014.pdf](http://journal.kagoshima-nature.org/archives/NK_045/045-014.pdf)



Fig. 1. Fresh specimen of *Platax boersii*, Uchinoura Bay, Kagoshima Prefecture, Japan (KAUM-I. 120205, 270.8 mm standard length).

定置網，畑 晴陵・川間公達・中村潤平.

記載 胸鰭軟条数 17；腹鰭棘数 1；腹鰭軟条数 5；側線有孔鱗数 51.

体各部の体長に対する割合 (%)：頭長 29.7；吻長 12.7；眼窩径 7.5；眼隔域幅 15.0；最大体高 92.1；最大体幅 19.9；尾柄長 10.4；尾柄高 15.4；上顎長 9.9；胸鰭長 22.2；腹鰭棘長 23.2；腹鰭長 39.8；眼後長 10.9；眼下骨幅 6.9；尾鰭長 20.5.

体は強く側扁し，円盤状を呈する．吻端から

眼の直上にかけての頭部背縁は体軸に対してほぼ垂直に近く，眼隔域は前方に膨出する．体背縁は眼の直上から背鰭基底後端にかけて，背鰭起部を頂点とした上に凸の弧を描く．体腹縁は下顎先端から腹鰭基底先端直下付近にかけて急激に下降し，そこから肛門にかけて緩やかに下降する．臀鰭起部から臀鰭基底後端にかけての体腹縁は急激に上昇する．尾柄部は体背縁，体腹縁ともに体軸とほぼ平行．腹鰭基底先端は前鰓蓋骨後縁よりも

わずかに後方、腹鰭基底後端は胸鰭基底上端よりも後方にそれぞれ位置する。腹鰭は伸長するが、たんだ腹鰭の後端はわずかに肛門に達しない。胸鰭基底上端は鰓蓋後端よりも前方、吻端よりも下方に位置する。胸鰭基底下端は腹鰭基底後端よりもわずかに後方に位置する。胸鰭上縁は直線状を呈し、後縁は丸みを帯びる。胸鰭後端は肛門直上に達しない。背鰭と臀鰭は基底部が幅広く被鱗し、棘部と軟条部間に欠刻はない。両鰭の棘は後部のものほど長くなり、大部分が皮下に埋没する。尾鰭は二重湾入形に近い形状を呈し、後縁中央部は後方に膨出する。尾鰭の上下両縁は直線状に近い形状を呈し、両葉後端は尖る。眼と瞳孔はいずれも正円形。鼻孔は2対で前鼻孔と後鼻孔は互いに近接し、眼の前縁前方に位置する。前鼻孔はほぼ正円形を呈し、後縁に皮弁を有する。後鼻孔は背腹方向に長い裂孔状を呈し、皮弁はない。口裂は小さく、上顎後端は眼の前縁直下に達しない。上顎は被鱗しない。両顎には絨毛状歯が密生し、歯帯を形成する。前鰓蓋骨と鰓蓋の後縁はいずれも円滑。下顎腹面には左右で5対の感覚孔が並ぶ。

**色彩** 生鮮時の色彩 一体は様々に灰色がかかった銀色を呈し、上部と下部はそれぞれ黄緑色と白色を帯びる。体側上後部には体側鱗よりも小さい不明瞭な小黒色斑が散在する。吻端から背鰭前縁にかけては黒褐色。背鰭、臀鰭、および尾鰭は鶯色を呈し、それぞれの後縁は黒色。尾鰭基底部に黒色横帯がある。腹鰭は様々に黒色を呈し、基底部付近はわずかに黄緑色を帯びる。胸鰭は黒色を呈し、中央部に白色域がある。胸鰭後縁は黄緑色がかかった半透明。鰓蓋後縁は黒色。瞳孔は青みがかかった黒色を呈し、虹彩は茶色がかかった黒色。

**分布** 日本からインドネシアにかけての西太平洋に分布する（岸本ほか, 1988；岸本, 1997；Heemstra, 2001；林・萩原, 2013）。日本国内においては福井県、岩手県から高知県以布利にかけての太平洋沿岸、伊豆諸島、小笠原諸島、大隅諸島、沖縄諸島、および八重山諸島から報告されており（岸本ほか, 1988；三浦, 2012；林・萩原, 2013；Koeda et al., 2016；鏑木, 2016；Motomura and Harazaki, 2017；木村ほか, 2017）、本報告により、

鹿児島県大隅半島東岸における分布も確認された。

**備考** 内之浦湾産の標本は、体高が著しく高く、体長の92.1%であること、背鰭と臀鰭の基底部が幅広く被鱗し、棘部と軟条部間に欠刻がないこと、両鰭の棘の大部分が皮下に埋没すること、背鰭棘が後部のものほど長くなることなどが、岸本ほか（1988）によって定義された *Platax* 属に同定された。さらに、本標本は眼隔域の前縁が膨出すること、腹鰭が暗色を呈すること、腹鰭基底後方に黒色斑を欠くこと、体が様々に銀白色を呈すること、側線有孔鱗数が51であることなどが岸本ほか（1988）や Heemstra（2001）、林・萩原（2013）によって報告された *P. boersii* の標徴とよく一致したため、本種に同定された。

*Platax boersii* を日本から初めて報告したのは石川・松浦（1897）と思われる。彼らは八重山諸島から得られた個体（NSMT-P.713）を *Platax teira*、和名を「つばめだひ」として報告した。この個体はミカヅキツバメウオであることが確認されている（岸本ほか, 1988）。

また、「ミカヅキツバメウオ」という和名は檜山・安田（1971）によって提唱された。彼らはフィリピン産の個体の写真を *P. teira* として示すと同時に新称として上記の和名を提唱した。彼らの示した個体は幼魚であるが、体側の横帯が全て幅広いことや、腹鰭が短いこと、尾鰭に黒色横帯がみとめられないことなどから、林・萩原（2013）においてツバメウオの和名を与えられている *P. teira* であると思われる。その後、河野（1982）は学名は記していないが、西表島に複数のミカヅキツバメウオが出現したことを水中写真に基づき報告した。林（1984）は *P. boersii* を *P. teira* として、その和名をミカヅキツバメウオとして西表島産の2個体を報告した。日本産ツバメウオ属の和名と学名の対応関係は岸本ほか（1988）によって整理され、彼らは *P. boersii* に対し和名ミカヅキツバメウオを与え、林・萩原（2013）もそれにしたがっており、本研究でも岸本ほか（1988）の対応関係にしたがった。

ミカヅキツバメウオは岩手県宮古市（Jordan

and Fowler, 1902), 相模湾 (岸本ほか, 1988), 和歌山県西牟婁郡白浜町 (池田・中坊, 2015), 土佐湾 (岸本ほか, 1988), 高知県土佐清水市以布利 (小畑, 2001), 沖縄諸島伊江島 (Senou et al., 2006), 沖縄島中城湾 (三浦, 2012), 八重山諸島西表島 (河野, 1982; 岸本ほか, 1988; 岸本, 1997), 与那国島 (Koeda et al., 2016) など, 散発的ではあるが, 日本国内広域から記録されている。鹿児島県内において, ミカヅキツバメウオの記録は少なく, 大隅諸島からのものに限られ, 以下の事例が報告されている。鏑木 (2016) は種子島中部東岸に位置する中種子町大塩屋港において釣獲されたミカヅキツバメウオの幼魚 1 個体の写真を報告し, 吉野 (2008) は屋久島近海の水面直下において撮影された本種の幼魚の水中写真を報告した。Motomura (2017) は屋久島北西岸に位置する吉田漁港で得られた 1 個体のミカヅキツバメウオ (KAUM-I. 41829, 体長 62.0 mm) を報告し, 木村ほか (2017) は口永良部島から得られた体長 228.5 mm の本種 1 個体 (BSKU 64166) を報告した。

したがって, 内之浦湾から得られたミカヅキツバメウオの標本は本種の九州沿岸における初めての記録となる。ミカヅキツバメウオは著者らによる 5 年以上にわたる内之浦湾の魚類相調査においても確認されておらず, 内之浦湾における本種の出現は極めて稀なものであると思われる。なお, 沖縄県においてはツバメウオ属魚類を「かーさー」, 「なんばんかーさー」などと称し, 食用とするが (岸本, 1997; 三浦, 2012), 内之浦漁港においてはミカヅキツバメウオと同じツバメウオ属魚類であるツバメウオが頻繁に水揚げされるものの, これらは食用にならず, 投棄されることがほとんどである (小枝, 2018)。本研究において記載をおこなったミカヅキツバメウオは, 水揚げ当時, ツバメウオと区別されず, 出荷されることなく投棄されていた。

また, ミカヅキツバメウオは本属魚類の中では小型種であり, その最大全長は Heemstra (2001) において, 30 cm とされている。最大体長に関して明記されている文献は少ないものの, 本種 28 個体の形態を詳細に報告した岸本ほか (1988) の

用いた標本の最大体長は 220 mm であるほか, 林・萩原 (2013) は本種の最大体長を 25 cm としている。本研究の記載標本の体長と全長はそれぞれ 270.8 mm, 330.0 mm と上記の記録をいずれも上回り, これまで知られている中では本種の世界最大の標本であると思われる。

## ■ 謝辞

本報告を取りまとめるにあたり, 標本の採集に際しては鹿児島大学大学院水産学研究所の川間公達氏, 中村潤平氏, 上城拓也氏, ならびに内之浦漁業協同組合の関係者の皆様には多大なご協力を頂いた。また, 原口百合子氏をはじめとする鹿児島大学総合研究博物館ボランティアと同博物館魚類分類学研究室の皆さまには適切な助言を頂いた。以上の方々に謹んで感謝の意を表す。本研究は, 鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島県産魚類の多様性調査プロジェクト」の一環としておこなわれた。本研究の一部は笹川科学研究助成金 (28-745), JSPS 研究奨励費 (DC2: 29-6652), JSPS 科 研 費 (19770067, 23580259, 24370041, 26241027, 26450265), JSPS 研究拠点形成事業－B アジア・アフリカ学術基盤形成型, 国立科学博物館「日本の生物多様性ホットスポットの構造に関する研究プロジェクト」, 文部科学省特別経費「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点整備」, および鹿児島大学重点領域研究環境 (生物多様性・島嶼プロジェクト) 学長裁量経費の援助を受けた。

## ■ 引用文献

- 江戸岡清峰. 2018. マンジュウダイ科. Pp. 432-433. 中坊徹次 (編), 小学館の図鑑 Z 日本魚類館. 小学館, 東京.
- 林 公義. 1984. ミカヅキツバメウオ *Platax teira* (Forsskål). Pp. 175-176, pl. 171-H, I. 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫 (編), 日本産魚類大図鑑. 東海大学出版会, 東京.
- 林 公義・萩原清司. 2013. マンジュウダイ科. Pp. 1609-1611, 2212. 中坊徹次 (編), 日本産魚類検索 全種の同定, 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- Heemstra P. C. 2001. Ephippidae, spadefishes (batfishes). Pp. 3611-3622, in Carpenter, K. E. and Niem, V. H. (eds.), FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific. Vol. 6. Bony fishes part 4 (Labridae to Latimeriidae), estuarine crocodiles, sea turtles, sea snakes and marine mammals. FAO, Rome.

- 檜山義夫・安田富士郎. 1971. 日本沿岸魚類の生態. 講談社, 東京. 337 pp.
- 池田博美・中坊徹次. 2015. 南日本太平洋沿岸の魚類. 東海大学出版部, 秦野. xxii + 597 pp.
- 石川千代松・松浦敏一郎. 1897. 帝国博物館天産部魚類標本目録. 帝国博物館, 東京. 64 pp.
- 岩坪洗樹. 2017. マンジュウダイ科. P. 253. 岩坪洗樹・本村浩之(編), 火山を望む甕海 鹿児島湾の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 鹿児島・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- Jordan, D. S. and Fowler, H. W. 1902. A review of the Chaetodontidae and related families of fishes found in the waters of Japan. Proceedings of the United States National Museum, 25 (1296): 513–563.
- 籾木紘一. 2016. 種子島の釣魚図鑑. たました舎, 西之表. 157 pp.
- 木村祐貴・日比野友亮・三木涼平・峯苦 健・小枝圭太. 2017. 緑の火山島 口永良部島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 200 pp.
- 岸本浩和. 1997. マンジュウダイ科. Pp. 630–632. 岡村 収・尼岡邦夫(編), 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- 岸本浩和・林 公義・河野裕美・森山 修. 1988. 日本産ツバメウオ属魚類の分類学的再検討. 横須賀市自然・人文博物館研報(自然科学), 36: 19–38, pls. 3–4.
- 河野裕美. 1982. 愛すべきサンゴ礁の魚たち(5), ツバメウオの暮らしぶり. フィッシュマガジン, 18 (7): 70–71, 74–75.
- 小枝圭太. 2018. ツバメウオ *Platax teira* (Forsskål, 1775). Pp. 405–406. 小枝圭太・畑 晴陵・山田守彦・本村浩之(編), 黒潮あたる鹿児島海 内之浦漁港に水揚げされる魚たち. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- Koeda, K., Hibino, Y., Yoshida, T., Kimura, Y., Miki, R., Kunishima, T., Sasaki, D., Fukuhara, T., Sakurai, M., Eguchi, K., Suzuki, H., Inaba, T., Uejo, T., Tanaka, S., Fujisawa, M., Wada, H. and Uchinyama T. 2016. Annotated checklist of fishes of Yonaguni-jima island, the westernmost island in Japan. The Kagoshima University Museum, Kagoshima. vi + 120 pp.
- 公益財団法人鹿児島市水族館公社. 2018. 鹿児島水族館が確認した — 鹿児島島の定置網の魚たち 増訂版. 公益財団法人鹿児島市水族館公社, 鹿児島. 335 pp.
- 栗岩 薫. 2018. マンジュウダイ科. P. 373. 本村浩之・萩原清司・瀬能 宏・中江雅典(編), 奄美群島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島・横須賀市自然・人文博物館, 横須賀・神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原・国立科学博物館, つくば.
- 三浦信男. 2012. 美ら海市場図鑑 知念市場の魚たち. ウェーブ企画, 与那原. 140 pp.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp. (<http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/staff/motomura/dl.html>)
- Motomura, H. 2017. Review of the ichthyofauna of Yaku-shima island in the Osumi Islands, southern Japan, with 15 new records of marine fishes. Pp. 74–80, in Kawai, K., Terada, R., and Kuwahara, S. (eds.), The Osumi Islands: Culture, Society, Industry and Nature. Hokuto Shobou, Kyoto.
- Motomura, H. and Harazaki, S. 2017. Annotated checklist of marine and freshwater fishes of Yaku-shima island in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 129 new records. Bulletin of the Kagoshima University Museum, 9: 1–183.
- Nakae, M., Motomura, H., Hagiwara, K., Senou, H., Koeda, K., Yoshida, T., Tashiro, S., Jeong, B., Hata, H., Fukui, Y., Fujiwara, K., Yamakawa, T., Aizawa, M., Shinohara, G. and Matsuura, K. 2018. An annotated checklist of fishes of Amami-oshima Island, the Ryukyu Islands, Japan. Memoirs of National Museum of Nature and Science, Tokyo, 52: 1–157.
- 西 大樹. 2014. マンジュウダイ科. Pp. 550–551. 本村浩之・松浦啓一(編), 奄美群島最南端の島 与論島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島・国立科学博物館, つくば.
- 小畑 洋. 2001. ミカヅキツバメウオ. P. 249. 中坊徹次・町田吉彦・山岡耕作・西田清徳(編), 以布利 黒潮の魚. 海遊館, 大阪.
- Senou, H., Kodato, H., Nomura, T. and Yunokawa, K. 2006. Coastal fishes of Ie-jima island, the Ryukyu Islands, Okinawa, Japan. Bulletin of the Kanagawa Prefectural Museum (Natural Science), 35: 67–92.
- 吉野雄輔. 2008. 山溪ハンディ図鑑 13 図鑑日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京. 543 pp.